

エズラ記は現代の私たちにとって、聖書中最も後味の悪い書かもしれません。イスラエル人の宗教政策によっていきなり離縁され、路頭に迷うことになった異民族の女たちの中には、イスラエル人との間の子どもを産んだ者たちもいた、と言って終わるのです。幼子を抱え悲しみ絶望する女たちの心は無視され、まるで正義のための当然の犠牲とでも言うかのように終わります。

聖書のテーマは、私たちにとって暖かい家庭より、純粋な宗教が重要だということなのではないでしょうか。断じてそうではありません。しかし解決には数百年の時をかけ、神様からの救いを待たなければなりません。罪とは私たちにはどうしても解決できず、遠大な神様の時を待つ以外にないことがあります。反対に言えば、自分の一生のうちに解決を見なかったとしても、永遠の神様の時の中で必ず救いが与えられると信じる事が出来ます。聖書を開きましょう。エズラ記 9 章 6-15 節です。

背景

アッシリアとバビロンによる捕囚からの帰還は数回にわたってなされました。まず第一弾の帰還民がバビロン捕囚の 70 年後、エルサレムに帰って来て神殿を再建しました。さらにその後、第二期帰還の民が、エズラをリーダーにして帰って来て、かつて奪われた神殿の宝物をもとに戻し、全焼の生贄を捧げて神様を礼拝しました。それはお祭りのように嬉しく楽しいことでした。ところがその祝祭ムードに水を差す出来事が発覚したのです。

捕囚されずにこの地に残っていた民と、第一弾帰還民の一部の者が、捕囚の間に反対にこの地に連れて来られた異民族の娘と結婚していたのです。現代なら交流として歓迎される国際結婚ですが、ユダヤ人にとっては民族の純粋性を侵害する雑婚として、在ってはならない出来事でした。

イスラエルの実態を知って衣を裂き、食を断って祈ったエズラの祈りが、今日読んだところです。

1)救われてなお奴隷

捕囚からペルシャによって祖国に帰還したと言っても、イスラエルがどこからも支配されずに独立国家となったのかと言えばそうではありません。依然としてペルシャの属国のままです。そのことをエズラは切々と祈っています。

先祖の時代から続く私たちの罪は天にまで達するほどで、私は恥じ入るあまり顔を上げることができませんと祈っていますが、これは捕囚が始まったばかりの頃、エゼキエルが「回復の時に、お前たちは罪と忌まわしいことのゆえに自分自身を嫌悪する」と言っていた通りの姿です。(エゼキエル 36 : 31)

そうして今なお奴隷のままではありますが、神様は憐れみによってわずかに生きる力を授けて下さった。支配者であるペルシャの王に好意を得て、神殿を建てることができたのです。と感謝をもって述べています。

エズラの信仰の健全なところは、帰還を独立と取り違えることなく、自分たちが未だに奴隷であると言う事実をごまかさずに認めているところです。

2)罪深い者としてみ前にぬかずく

続けてエズラは、この時の問題を告白して祈ります。異民族との結婚は、彼らの間違っただけの宗教と結びつき、偶像礼拝に直結する、そのために雑婚は禁じられている。ところが、帰還の喜びをいただいた今、またしても先祖と同じ罪を犯してしまいました。あなたのみ怒りを招き、一人残らず滅ぼされても当然だと認めています。

憐れみの神様とは、罪をなんとなく見逃す方なことではありません。また人間の罪はそんなに安上がりで解決する問題ではありません。むしろ、一旦犯した罪はどうにもならない悲惨を引きおこすものであると認めなければなりません。

「罪の深さ故にどうにもならない。」これが人間の直面する現実です。この祈りは「み前に立ちえないのですが、罪深い者としてみ前に額ずいております」と結論を出さずに、人間の罪深さの告白で終わっています。しかしエズラの祈りには希望があります。重要なのは、額ずいているのは主なる神様のみ前だという事です。み前でじっとしている時、神様からの解決がやってきます。

3) 離縁の理由と問題

エズラの祈りを聞き、共感して共に祈った人たちは、異民族の妻と離縁する決断をします。外国の支配を受けている間、戒律を知ることは困難でしたから、雑婚は無理のないことであつたのだらうと思います。しかし捕囚の原因は偶像礼拝と、その対になる雑婚だと言うのが彼らの実感でした。捕囚の際、家族は生き別れとなり、取り残されて飢えに苦しむ女たちが、自分の子の肉を食うという悲惨を経験した彼らにとって、捕囚に舞い戻るより、離縁する方がましだと思ったのでしょう。

また、国が奪われた後、神に選ばれた民として残っているアイデンティティは、血統の純粋性と律法です。書記官で律法の専門家であったエズラにとって、血統が揺らぐことは一大事で、だからこそ残る縁の律法を守るとは民族の必須条件となりました。その律法によって雑婚の問題に取り組むのは、イスラエル民族存亡をかけた重大事だったのでした。

しかしこの離縁の処置は、様々な問題を抱えています。

第一に、律法の本質を見失っていることです。神様がなぜ雑婚を戒めておられるかと言えば、主への信仰が異民族の宗教に汚染されて、まがい物になってしまうためです。偶像を拝むこと以上に、本物がにせ物になって偶像となってしまうと、それは偶像崇拜しかない世界になってしまいます。つまり雑婚以上に、偶像礼拝が根本の問題です。一方、ダビデ王の祖父ボアズはモアブ人の女ルツと結婚しています。ダビデはイスラエル人とモアブ人のクォーターです。ボアズの誠実な愛によってルツは主を「私の神」と告白しつづけました。この例が示す通り、異民族との結婚は祝福へと変えられる可能性を持っています。そもそも神様はアブラハムを選び、イスラエル民族を起す時から、この民族を通して世界が祝福を受けることを願っておられました。律法の本質は主を愛すること、自分を愛するように人を愛することです。

第二の問題は、ここから律法主義が始まったことです。彼らは徹底的に偶像を避け、血統の純粋性を守ることに熱心になり、その結果生まれたのは律法を細分化して、盲目的に守り抜く、宗教に熱心な姿勢です。そこまでして律法主義に走る動機の一つが、この離縁の経験だったのではないかと思います。「あの時、離縁の悲しみを負ってまで、犠牲を払って律法を守った。これからもどんな犠牲も惜しまずに律法だけを守ろう。」と考えたわけです。神様との親しい交わりを与えられ、神様を愛して律法を尊ぶというのとは反対に、自分がどれだけ痛みを持って律法を守っているかで自分を評価し、神様との関係を築こうとする姿勢です。

そして恐ろしいことに、痛みほど強い刺激はありません。一旦脳がこの刺激を経験すると、なんとしてでも繰り返したい衝動に駆られる、依存症が始まっていきます。より痛い犠牲を払って律法を守る恍惚感はどんな麻薬よりも恐ろしいもので、人の心をひきつけて離しません。律法主義はこうした依存症の問題であるからこそ、なかなか離れることができないのです。

第三の問題はもちろん、捨てられた女たち、子供たちの悲しみです。運よく父の家に帰れば良いけれど、この時代、身寄りがなくなった女性が生きる術は、落穂を拾う、物乞いをする、奴隷として身を売るなどしかなかったと考えられます。父の家に帰ったところで、その家でイスラエル人に対する恨みは激しくなり、当然、イスラエル人の父を持つ子供たちは、憎悪の的とされたことでしょう。やがてイスラエル人の血を引きながらイスラエルと激しく対立する、サマリヤ人が形成されて行きました。

エズラ記の結末、異民族の娘との離縁は、解決になっていないばかりか、新たな問題を引き起こしています。現に今でも、イスラエル人と周辺諸国の対立は根深く続いています。偶像礼拝の罪と律法主義の罪は、何千年も

の歳月をかけても取り返しのつかない問題です。罪とはそれほどの恐ろしさを持っています。

結)サマリヤの女へ、放蕩息子の兄へ

しかし、離縁された女たちの苦しみ、律法主義の犠牲となった子供たちの悲しみに、そっと寄り添って、共に涙しておられた方がいます。イエス様です。イエス様はこの時すぐに彼らを助け出すこともできたはずですが、ただ黙って寄り添っておられました。人の目から見ると何もしてくれない無力な神に見えます。しかしそれはイエス様が全能者であることを断念して、何もできない者となり、世界の一番低い人々の下に遜って下さった姿でした。イエス様がそこまでしなければ罪の結果を解決することはできないのです。

エズラから凡そ 450 年後、イエス様は全く無力な赤ん坊としてこの世界に来てくださいました。旅の途中わざわざ遠回りをしてスカルの井戸にサマリヤの女を訪ね、5つの異民族の男と結婚しては離縁された悲しみを背負う彼女に、救いの良い知らせを告げました。何としてでも彼女に喜びを与えたかった。イエス様はあの時離縁された女たち子供たちを見捨てるつもりなどなかったのです。

一方で、律法の本質は愛だと答えることのできた律法学者を励まして、ご自身を善いサマリヤ人にととえて話し、人を愛する本当の姿を示してくださいました。また別の機会には放蕩息子のたとえを用いて、痛みの依存症に陥り、犠牲を払うことで父への従順を示そうとしてきた兄息子である律法主義者を、和解の食卓へ迎えようとなさいました。

その生涯の結末は十字架です。全能者である方がご自身の栄光を何もかも捨てて、全人類が続けてきた悲惨を背負い、罪の結果である死を十字架で引き受けられたのです。主なる神様はこのイエス様を、絶望の墓から復活させられました。サマリヤの女も、律法主義の男も、共にイエス様の和解の食卓へ着くことが、480年前の離縁の悲しみから始まった、イエス様の念願でした。

さてここで改めてエズラの祈りを見ましょう。

「私たちは依然として奴隷です。私たちの罪は天に届くほどで、もはやどうすることもできません。罪深い者としてみ前に額ずいています。」

私たちのクリスチャンライフの中で、救われれば罪と死の支配から解放されて、身分潔白、喜びばかりの人生が約束されているのかと期待して、そうはならない現実に苦しむことがあります。私たちは救われてもなお死に向かう者と宿命づけられている現実を知らなければなりません。その事実で落胆する毎日です。

しかし決して絶望する必要はありません。主の憐れみがあるからです。主がご支配されて、奴隷の身でありながら主を礼拝する者として選び、主の前に額づく者とされています。

自分の罪を自覚して正直に祈りましょう。その場に止まり、罪深い者としてみ前に額づくきましょう。同時に罪の奴隷である自分にではなく、神様のみ前に額づく自分に目を転じましょう。自分の知っている自分から、神様に知られている自分に目を向ける事、これが方向転換＝悔い改めという事です。

その時、解決は主から与えられます。罪の結果に苦しみ悩む人に寄り添ってくださるイエス様は、遜ってあなたの元へ来てくださり、十字架の血潮を注ぎ、神様への愛、自分を愛し、人を愛する愛へ招いてくださいます。

お祈りします　ああ主よ、私たちは救われてなお、罪に支配されている死の奴隷のままです。罪深い者としてみ前に額ずきます。私たちの手に負えない罪の結果一分断と憎悪の世界を、イエス様が贖い、私たちの対立を乗り越えて和解の食卓へ招いてくださいます。そのために十字架にかかって復活されたイエス様のお名前でお祈りします。アーメン。